

グローバル化した世界におけるフランス語教育とは L'enseignement du français dans un monde globalisé

武内 英公子

TAKEUCHI Ekuko

Université de Kobe

VZC05125@nifty.com

大学の外国語教育を取り巻く環境が激変する中、当の外国語教師はなかなか時代に適応した新しい外国語教育のあり方を見出すことができていないように思われる。なぜなら自主的に、例えばランコントルのような外国語教育の研究会に参加しない限り、そのような機会がないからである。

3月28日「グローバル化時代の神戸大学の教育について」という外国語オリエンテーションに参加したのだが、まず英語のコミュニケーション能力をつけることが最優先事項で、それ以外の外国語は、コミュニケーションに役立つ異文化理解のためという位置づけを、大学側が明確に打ち出していた。さらに英語以外の外国語の授業においても「文学談義」を封印して、コミュニケーションスキルに特化し「グローバル人材」の育成を要請していた。ただ、個々の教師の授業内容に踏み込むものではなく、この趣旨に沿って教師の自発的努力で「使える」外国語を教えるようにということであった。とはいえ、実際に学生たちに向き合わなくてはならない個々の教員の立場としては、大学でフランス語を学ぶ意義についての問い直しが必要になるだろう。個人的には、大学からの要請、学生たちのモチベーションの維持以外にも、教師である自分自身が英語の必要性を日々実感している以上、自分の実践するフランス語教育と英語教育との関連性を考慮せずに行うことはできない。大学という教育的な場所で、単に「時代に乗り遅れてはならない」という理由で、学生にとって競争に打ち勝つための「使える」英語だけを学ぶことが大学の外国語教育には必要なのだという皮相な価値観には当然賛成しかねるが、ただ、まず英語を習得することが現代社会においてさらに重要性を増しているという点を踏まえ、いきなり理念的な話をして学生の心をつかむ事は困難である。まず英語習

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

得の重要性を認めた上で、こうしたグローバルな社会だからこそ、多様な価値観を持つ他者と交渉し協働していけるコミュニケーション能力を育成するための複言語主義的な外国語教育が必要なのだということを訴えていくのが、今後のフランス語教育を考えていく上での現実的なあり方ではないだろうか。個人的には福島原発事故の際、フランス語能力のおかげで原発国家フランスからの的確な情報がいち早く確認でき、さらに英語情報との比較によって情報の相対化や立体化が可能になったことで、英語以外の言語もできることのメリットを大いに感じた。現代社会においては、このような個人の危機管理能力の一環としても複数言語の能力は役に立つということをアピールできるかもしれない。

しかしながら現実問題として、単位がラクに取ればいいなあと考えている学生が多い現状を鑑みるに、学生に自分にとっての「外国語学習の本当の利益」とは何なのか考えてもらう前に、まずフランス語の授業に何らかの意味を見出し、積極的に参加してもらうことが必要になるだろう。つまり、まず学生たちのフランス語を学習したいという意欲を引き出せないことには、すべて絵に描いたモチとなってしまふということだ。「授業を受けることでフランス語が実際に使えるようになること」「授業を含め学習そのものが楽しいこと」などはその鍵となる。現実には英語＋フランス語の学習になることを考えると学習効率を上げること、あるいはフランス語学習と英語学習がシナジー効果を生むような授業を設計することも有効だろう。そしてこれらの観点を盛り込み、「授業そのものを楽しく」するためには、学生が自ら授業を作り上げることに参加し、教師自身がパフォーマンスに授業を展開することが不可欠だ。外国語を少しでも身体化し使えるようになったという達成感を伴うことが学習者の満足感につながるからである。学習者の多くは言語そのものの細かな規則や歴史を知りたいわけではなく「使ってみたい」と思っている。もちろん文法を知らないと話せないというのも事実だが、特に実利性が高くない外国語の学習において、長期的な目的のために学習し続けるほど学習者が辛抱強くないということもまた事実なのだ。したがって教師が教壇から文法の説明をするのを、学生が座ったまま聞き、黙々と練習問題を解くというスタイルでは、パフォーマンスな技能は身につかず、学習者の意欲が右肩下がりになることは目に見えている。実際に教室内で外国語を使う体験ができる仕掛けを作ることがこれからの外国語教育には求められてゆくだろう。

具体的な授業方法については次稿に回すことにするが、本稿においては、まずフランス語教育が英語教育との関連性を意識することなしにできなくなったことを示しておきたい。当のフランスが自国語のプレゼンスと英語教育に対するスタンスを激変させた事実を把握しておくことは、学生に誤った幻想を抱かせず、学生が、学ぼうとする外国語との適切な関係とモチベーションを維持するのに重要だと思うからである。またそうして初めて、今後フランス語を学ぶ意義を改めて問い直すことが可能となるからだ。

フランス語のフランスにおける立ち位置

フランスは長らく反英語（反英米的価値観）の牙城と考えられてきたが、近年高等教育における英語使用の重要性を叫ぶ声が日増しに強くなっている。それは自国語の地位の急速な下落と表裏一体の現象であろう。Jacques Toubonが文化相在任中の1994年に、「正しい」フランス語を保存する見地から制定したLa loi Toubonは今や事実上骨抜きである。この法律によれば大学で教えるための言語と博士論文執筆のために使用される言語はフランス語でなくてはならないということになっているが、実は特例規定がいくつかあり、Sciences-Po (Institut d'Etudes Politiques de Paris パリ政治学院) ではすでに授業がほぼ英語という事態になっている。2010年10月7日付け電子版Figaro紙¹によれば、すでにエンジニア系のグランドゼコールのカリキュラムのおよそ3割、経営系のグランドゼコールの8割、また大学の理系、経済系、エンジニア系のマスターもほぼ同じ割合で、英語が使用されている。このような現状を前にして、パリのデファンス地区とシンガポールにキャンパスを持つEssec (L'École supérieure des sciences économiques et commercialesエセック経済商科大学)の総長Pierre TapieはLa loi Toubonの「修正」を求め、ハーバード大学の学位取得者たちを教員として迎え入れているトゥールーズ第一大学学長Bruno Sireは「トゥーボン法はフランス語にとって親切な法律ですが、もはや学問の言語は英語なんです。18世紀に我々の言語は最も優秀な頭脳を引き付けることが出来ました。我々はこのアドヴァンテージを失ってしまったんですよ。」と述べている。Geneviève Fioraso高等教育・研究大臣の法案が通れば、現在は違法状態である「すべて英語で教える」カリキュラムがさらに広がることになるだろう²。2010年3月19日付け電子版Figaro紙³でも指摘されるように、2000年から2015年の間に世界の学生数は1億から2億になるが、ユネスコと経済企画庁の予測によればその増加分の4分の3はアジアから、そしてその大半は中国とインドからの学生である。2010年11月イギリスで大学授業料引き上げ案が発表された際、イギリスの学位の受け皿として有力候補となったのが、授業料が安く⁴、英語の授業が充実しているオランダであった例を挙げるまでもなく⁵、お金を落としてくれる学生と優秀な研究者を引き付け、グローバル市場において競争力のある学生を養成するために、高等教

¹ 2010年10月7日付け電子版 Figaro 紙

<http://www.lefigaro.fr/actualite-france/2010/10/06/01016-20101006ARTFIG00739-ecoles-et-universites-veulent-enseigner-en-anglais.php>

² 2013年3月13日付け電子版 Figaro 紙

<http://etudiant.lefigaro.fr/les-news/actu/detail/article/l-universite-francaise-veut-creer-des-diplomes-en-anglais-1420/>

³ 2010年3月19日付け電子版 Figaro 紙

<http://www.lefigaro.fr/actualite-france/2010/03/12/01016-20100312ARTFIG00018-la-france-se-prepare-a-un-afflux-d-etudiants-etrangers-.php>

⁴ イギリスの大学は値上げ前で年間約40万円に対しオランダの大学は平均18万円。

⁵ <http://cyberbloom.seesaa.net/article/267467374.html> 「欧州の大学事情」

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

育での英語の使用は規定値となりつつある。フランスの高等教育機関への外国人学生の留学を促進するためのフランス政府による公式機関であるCampus Franceのサイトにおいても英語で提供している700のカリキュラムを提示し、フランスの高等教育機関でも英語で学位が取得できることをアピールしている⁶。

同時にEUの公式文書においてもフランス語の英語に対する国際的地位の低下が顕著に見られる。フランス語がオリジナルであったものは86年60%から現在11%に、一方英語がオリジナルであったものは28%から72%にという結果になっているのだ。

これらの流れは、世界中の学生にとって、授業についていけるだけの英語力があれば今後あらゆる国の大学を進学候補にすることができるようになってきたことを意味する。しかしながら同時にこうした事態は英語ができなければ高等教育の機会さえ奪われかねない状況と表裏一体だ。また、文学系・人文科学系ではまだ微妙であるとはいうものの、フランスの大学でマスター・ドクターの学位取得が英語でできれば、フランス語学習の理由の一つが消えることになる。旅行する際にも英語が通じれば、フランス語を学習する日本人が減るかもしれない。このような状況では日本人学生がフランス語を学習する意味はおのずと変化せざるを得ないし、教える方も変化せざるを得ないだろう。

フランス語学習のファシリテーターとしての教師

しかしながら学生が外国語を学習する理由は上記以外にも十分ありえる。先ほど述べたように、まず学習者にフランス語を学びたいという意欲を持ってもらわないことには話は始まらない。よって学習者の意欲と学習効果の関係について知ること、具体的にどのように教えたなら学習者の動機づけが高まるかという問題に大きなヒントを与えてくれるはずだ。

第二言語習得論の動機付け研究によれば⁷、学習開始時の動機づけが続くとは限らないこと、学習活動が楽しくないと動機づけは下がること、十分な時間的投資をするに見合うだけの必要性がないと学習は続かないこと、などが指摘されている。この指摘に従えば、授業の内容によって動機づけは変化しうること、まず「楽しい」授業が動機づけを持続させうること、語学習得には十分な時間的投資、つまり持続的努力を要するので、たとえ興味があつたとしても「少なくとも今は」やらないというのは合理的な選択でありうることなどが推論できる。これらのことを考慮し、学習者の動機づけを高めるために、フランスの戦略転換に習い、「まず英語学習」が規定値であるという考え方を受け入れ、英語学習にもプラスになるフランス語学習という視点の導入が一案として考えられる。そもそも英語を学習したことの無い学生はほとんどいないはずで、少なくとも大学レベルの英語の文法知識や語彙力は備えているのであれば、日本語よりも言語間の距離の近い英語の知識を利用してフ

⁶ Campus France

<http://www.campusfrance.org/fr/page/promodoc-pour-la-promotion-des-etudes-doctorales-europeennes>

⁷ 白井恭弘『英語教師のための第二言語習得論入門』, 大修館書店, 2012, pp. 20-26.

フランス語を教えることは理に適っている。例えば単語や文法概念などの理解が容易になり、二言語を比較することによって英語の理解も深まるだろう。現在このようなコンセプトに基づく教科書はまだあまりないようだが⁸、初等・中等教育ですでに複数の外国語教育を実践している欧州の先行事例を踏まえた教材開発が今後望まれる。また英語の知識はあるのに、それを実際に使う機会がないので、「ネイティブのように」なることを目指すのではなく、あくまで初習言語を教えるツールとして英語を使うことは、英語のヒエラルキー的位置づけをを相対化することにもなる。さらに外国語を教える際日本語で逐語訳をすることは日本人の外国語能力が伸びない大きな理由の一つであるが、その弊害も解消される。例えば指示を与えるのに使用する、文法説明する際に比較の対象とする、など様々な使用法が考えられるだろうが、あくまで学ぶ主体は学習者であり、彼らの学習意欲を持続させるための手段であるので、学習のトータルなプログラムのデザインが必要になる。

フランス語教育における教師の役割の増大

再び第二言語習得論の動機づけ研究によれば、動機づけというものは学習にプラスに働くので高いに越したことはないが、決定要因ではない。学習者の意欲をいかに学習行動に結びつけてあげられるかが教師の重要な役割となる。また動機づけは、アンケート調査によって得られるような静的なものではなく、タスクの与え方、学習活動によって変化する、というタスクモチベーションという考え方が注目されている。つまり同時に教師は学習者の漠然とした動機づけを具体化し高めていけるような授業を設計していかななくてはならないということだ。

グローバル化した世界で英語だけでなくフランス語も学ぶことの意義は何なのか。学生が持つ個々の動機、例えば「パティシエになりたい」「フランス旅行の際に使ってみたい」という動機は決して否定されるものではなく、教師はそれを最大限生かさなくてはならない。つまり教師は生徒にフランス語学習の意義を上から与えるだけの存在ではなく、情報提供者となり彼らの学習動機を授業の中で具現化する役割を担う。学習の成功は、個々の学習者が自分にとって納得するフランス語学習の意義を見出せるかどうかにかかっている。したがって教師が、個々の学習者のフランス語学習の目的を踏まえ、例えば大学の授業であれば授業外の学習を含んだ一年単位での長期にわたるプログラムをデザインすることが学習の成功につながる。より効率的に外国語を学ぶ方法を伝授するためにも、フランス語教育のみならず英語教育の知見も利用し、日進月歩に変化する外国語教育の成果にキャッチアップしていくことが、語学教師にとってますます重要な時代になったということであろう。

⁸ 参考書では、久松健一『英語がわかればフランス語はできる!』、駿河台出版社、1999。滑川明彦・前川泰子『英語でわかるフランス語』、第三書房、2005。などがある。